

## 美術の窓(140)

## 1804年のお触書の影響 その二

大和文華館館長 浅野秀剛

文化元年5月17日(1804年6月24日)に、江戸の町人に当てて、「彩色摺にした絵本や草双紙が近年多く刊行されているが、とんでもないことである。今後は絵本や草双紙は墨摺りだけとし、彩色を加えてはならない。」というお触書が出た。

その影響は絶大で、それ以降、文化10年までのおよそ10年間、彩色摺の絵本類は刊行されていない。北斎画の狂歌絵本『絵本隅田川両岸一覽』もその影響を受けた作品であり、お触書が出た時、半ば仕上がっていたが、出版を断念し、およそ12年後の文化13年頃ようやく刊行されたと推定される。

また、やはり北斎画の代表的絵本『北斎写真画譜』も、文化10年12月24日に出版が許可され、刊記を付けない私家版めかして刊行、5年後の文政2年(1819)になって、ようやく版元と刊年を明記した形で刊行された。また、『北斎写真画譜』と同じ日に出版が許可された鋳形蕙斎画『草花略画式』も、『北斎写真画譜』と同じく岸本由豆流の序文があるので、彩色摺絵本のなし崩しの解禁をもくろんだ人々の中に、岸本由豆流がいたと考えられる。

文化元年のお触書の影響をまともに受けた作品が少なくとももう一点ある。北尾重政画『花鳥写真図彙(花鳥写真図会)』初編3冊であ

る。初印本の刊記は「文化二年乙丑正月吉辰」「書林 大阪心齋橋順慶町 柏原屋清右衛門／江戸本石町二丁目 西村源六／同三丁目十軒店 西村宗七寿梓」であるが、この刊記を持つ伝品には二種あり、一つは濃淡二色の墨摺本(図1)、もう一つは彩色摺本(図2)である。両者を比較すると、墨摺本の方がはるかに摺が早いこと、墨摺本にだけ「楢 葉わうど表朱ずみかけ実朱墨くま薄白きわうど」「啄木 朱のほかに白胸腹わうど嘴足わうど朱ずみくま」という色の指示(解説)が入り、啄木鳥の身体に「朱」という文字も入れられていることから、墨摺本が先に出され、後に、文字の一部を削除した彩色摺本が出されたことは明白である。凡例に「一、画、都て色を設ざれば一々真に迫るにあたはず、看宦怒宥し給へ」とあるのは、彩色摺でないのを詫びていることになる。「看宦怒宥し給へ」の意味は必ずしも判然としませんが、禁令があるので許してほしいと言っているのだと思う。この凡例は、彩色摺本になってもそのまま付けられている。

この『花鳥写真図彙』初編の出版が許可されたのは、文化元年12月23日なので、彩色摺の絵本を出すなどとんでもない、という時期であった。それでは、『花鳥写真図彙』

初編の彩色摺本が出されたのは何時かということになるが、残念ながら分からない。分からないが、文化10年以降まもなくという見当はつく。墨摺本と彩色摺本を比較すると、墨摺本がある種の気品を保っているのに対し、彩色摺本は、色調が重くいかにも野暮っぽい。版元など関係者の士気低下を如実に感じるのである。それに比べると、『絵本隅田川両岸一覽』は、格調を保っている。それは出版そのものを保留し、時期を窺っていたからに違いない。

私は直接確認していないが、小林ふみ子氏の「北斎画『絵本隅田川両岸一覽』の刊年をめぐって」(『詩歌とイメージ』勉誠出版、2013年)には、版木を実見した岩崎均史氏によるとして、本書の狂歌47種のうち25種の狂歌、狂名は入れ木である、と記されている。であれば、文化元年時点で、狂歌、狂名まで彫られていたものを、文化13年頃の刊行に際し、半ば以上を改めたということになる。現在、『絵本隅田川両岸一覽』は、20本以上伝存していると推定されるが、狂歌、狂名が異なる伝本は報告されていない。だから、幻の初版本が発見されない限り、入れ木前の『絵本隅田川両岸一覽』は制作刊行されていないとせざるを得ないのである。

単なる偶然かどうかは分からないが、北斎は、『絵本隅田川両岸一覽』の版下絵を描いて間もなく、同じような主題の「隅田川両岸景色図巻」(紙本着色一巻、すみだ北斎美術館蔵)を描いた。昨年11月に閉館したすみだ北斎美術館に全体が展示されて話題になった作品である。この作品には、文化2年(1805)4月14日に書いた烏亭焉馬の識語が備わっている。北斎が描いたのはその直前と考えられる。『絵本隅田川両岸一覽』が隅田川の両岸の情景に手前西岸の人物を融合させた構成であるのに対し、「隅田川両岸景色図巻」は、典型的な吉原通り図巻(前半に吉原の通り路としての隅田川の情景を描き、後半を吉原風俗とする図巻)である。吉原通り図巻は、寛政(1789~1801)末から鳥文斎栄之が量産するが、北斎の「隅田川両岸景色図巻」も、栄之の構成に倣っていることは確実である。ただ、図巻の最初、客が船に乗り込む場面の後に、柳橋上の人物群を描き(図3)、その部分だけはわずかに『絵本隅田川両岸一覽』の面影を残しているのが何とも切ない。「隅田川両岸景色図巻」を描いた時の北斎は、晴れ晴れとした気分ではなかったろうと想像している。



図1 東京都立中央図書館蔵、  
『原色浮世絵大百科事典』第七巻から複写



図2 大英博物館蔵

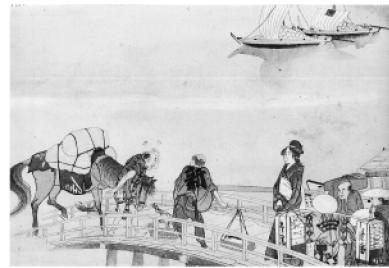


図3 すみだ北斎美術館蔵、  
『北斎の帰還』展図録から複写

季刊 美のたより No.198

平成29年 4月 8日

発行 大和文華館